

# 鬼畜

2006(平成18)年1月4日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

★★★★



監督＝野村芳太郎／原作＝松本清張／出演＝岩下志麻／小川真由美／緒形拳／岩瀬浩規／吉沢美幸／石井旬／蟹江敬三／大竹しのぶ(松竹配給／1978年日本映画／110分)

……真面目で勤勉な(?)夫には困い者の女がいた。しかも、3人の子供まで……。それを知った妻が怒り狂ったのは当然だが、何と今日からはその子供たちを押しつけられることに……。そこから始まる地獄の日々。そしてその中で芽生えたある気持とは……。人間は本来、善かそれとも悪か？ それは永遠に不知なるテーマかもしれないが、あなたの心の奥底にも、同じ気持はきっとあるはず。ひょっとしてあなたも、人間ではなく鬼畜……？

## 岩下志麻が鬼畜に変身……？

『五瓣の椿』(64年)で可憐な娘の手による復讐劇を見事に演じた岩下志麻が、その14年後の1978年、このタイトルどおり「鬼畜」に変身して鬼の形相を……。夫とともに一生懸命働いて何とか印刷屋の経営を維持してきたお梅(岩下志麻)にとって、夫が外に女を困い、その女との間に3人も子供をもうけていることをある日突然知らされたとすれば、その反応は……。さらに、その女から3人の子供の世話を押しつけられることになったとしたら、さてあなたなら……。そんな「鬼畜おばさん」を、1941年生まれ、当時37歳の岩下志麻が熱演！

## 序盤だけが、小川真由美も大熱演

映画の冒頭、3人の子供たちの世話をしている菊代(小川真由美)の姿が描かれる。時は夏真っ盛り。長男利一(岩瀬浩規)と長女良子(吉沢美幸)は2人で適当に遊んでくれているが、まだ乳飲み子の庄二(石井旬)は手がかかりそう。そんな風景の中、菊代は意を決したように「出かけるよ」と子供たちに声をかけ

た。乳飲み子を背中に背負い、2人の子供の手を引いて、汗をふきふき電車を乗り継いで行く、菊代の目的地は……？

## バトルの開始！

菊代は住所は知っているものの、今まで1度も行ったことがない様子で、近所の人に場所を尋ねつつやっと目的地へたどり着いたが、そこには竹下印刷所の看板が……。菊代はなぜかしばらく外から様子をうかがっていたが、ついに意を決して建物の中へ……。対応したのは従業員の阿久津（蟹江敬三）だが、そんな子連れの菊代の姿を家の奥から発見した主人竹下宗吉（緒形拳）は、妻のお梅（岩下志麻）や阿久津の目を気にしながら、菊代を押し出すように家の外へ。そこで菊代が宗吉に「要求」したのは生活費のこと。「明日必ず届けるから……」と必死でその場を収めようとする宗吉だが、そんな様子を遂にお梅が発見したから、さあ大変。いよいよバトルの開始だ！

## これぞ絶対的修羅場！

正妻のお梅と3人の子供を連れた2号さんの菊代との「論争」をじっと聞かなければならない男にとって、これは絶対的修羅場というべき状況。第三者の弁護士としての目で見れば、菊代が主張していることには十分な合理性があり、決して不当な要求でないことは明らかだが、他方、それに対するお梅の反論や妻としての主張も当然のもの。したがって男の私としては、2人がこのままお互いの立場をわきまえながら、穏便に「両者並立」という解決策も考えられるのだが、2人の女から見ればそれはとんでもないコト……？

既に最終列車に乗る時刻が過ぎたため、菊代と3人の子供たちは狭い家の中でふすま1枚隔てて泊まることになったから、一層大変。さて今夜関係者のみなさんは、ぐっすり眠ることができるだろうか……？

## 菊代の大英断の波及効果は？

ふすま1枚隔てただけで眠れぬ夜を過ごしたお梅と菊代だったが、それでもお梅は少しウトウトしてしまったよう。そんな中、菊代は3人の子供を父親の手に

委ねて自らは姿を消すという大英断を……。ふつう、母親はそういう決断をできないものだが、この菊代はその主張に論理性があったことからわかり、情実派ではなく理論派……。したがって、1度そういう決断をするやその行動は徹底しており、風の如く宗吉の家を後にし、それまで住んでいた家を引き払ったかと思うと、その後は全く所在不明となってしまった。

すると、残された3人の子供の面倒は誰がみるの……。？ 当然お梅は「私は知らないからね」と冷たく宣言したから、必然的に食事の世話からおしめの洗濯までその役目は宗吉が背負い込むことに……。阿久津は同じ男として、そんな宗吉に同情しているものの、第三者の従業員としての立場としては何も言えないうえ、そんな地獄の毎日を共に過ごすことに限界も……。

### ある時芽生えた感情はひょっとして……。？

仕方なく食事の用意など最低限のことはするものの、以降お梅は子供たちに対しては当たり散らし、宗吉に対してはイヤミを言い続ける毎日に。しかし小さい子供は、何かと手がかかるもの。末の庄二が熱を出していることを発見した宗吉は、急いで病院に連れて行ったが、先生からは「なぜここまで放っていた！」とお目玉を。そんなある日、2階に上がった宗吉の目に映ったのは、寝ている庄二の顔の上にかかっている大きなシート。このままでは窒息死の可能性があるが、これは偶然、それとも……。？ 慌ててシートを取り除いた宗吉だったが、この時宗吉の心に芽生えた感情はひょっとして、殺意……。？

### 第1の犠牲は……。？

その後さらに庄二は衰弱し、病院にも連れて行ったが、遂に死亡……。しかしこれって、ホントに衰弱死？ ひょっとして衰弱した庄二の顔の上にかけていたシートによる窒息死では……。？ そんな気持ちでお梅を疑った宗吉だったが、その夜お梅から「あんたも1つ気が楽になったね」と言われた宗吉は、自分の心の中を見透かされたような思いに……。

人間は心の奥底の気持が通じ合えば、仲良くなれるもの。それまで毎日バトルをくり広げていた宗吉とお梅夫婦は、その夜久しぶりに燃えあがり、お互いの肉

体をむさぼり合った。しかし、所詮それは一時だけの気の救い……？

## 第2の犠牲は……？

庄二はまだロクに口も利けない1歳半の幼児だが、長女の良子は4歳だから、お梅の怖さを十分に理解できる年齢。今日は、宗吉は何を思ったのかこんな良子を、東京タワーの見学へ連れて行くことに。もちろん良子は、それはうれしいのだが、子供心に「どこかで置き去りにされるのでは」と感じているようで、ずっと宗吉の手を握って離さない状態。デパートのお人形さん売り場で人形に目を向けさせようとしても、良子はすぐに振り向いて宗吉を確認し、その手を握りにくる始末……。実に痛々しい良子の行動だが、それでもなお宗吉は心を鬼にして、東京タワーの展望台にある大きな双眼鏡に良子を集中させた際に良子の元を離れ、1人エレベーターへ……。これって刑法上明らかな保護責任者遺棄罪（刑法218条）……？ そんな中、家の中に良子がいないことに気づいた利一は、必死で良子を探したが……。そして1人帰ってきた宗吉に対して、「良子は？」と何度も何度も問い質す利一に対して、宗吉は「よそで預かって貰った」と言い訳したが、6歳の利一にはそれがウソであることはバレバレ……？

## 利一の「処分」はやっかいだが……？

人間1つ罪を犯してしまえば、あとは2つやっても3つやっても同じと思うようになるもの……？ 1人目は半分偶然が重なった(?)が、2人目は明らかな故意による遺棄。しかし、3人目は分別もついているし、用心深い利一が相手だから、さてどんな手を……？ 多分いろいろと策を練ったのだろう。宗吉はこども号に利一を乗せて、北陸海岸への旅に。

なぜ宗吉が北陸方面を選んだのかはわからないが、その真相は多分『ゼロの焦点』（61年）や『砂の器』（74年）でもわかるとおり、松本清張は北陸方面が好きだということ。とりわけ、自殺の名所となっている北陸の断崖絶壁が、松本清張は好きなのでは……？

いくら用心深い利一でも、精一杯遊んだ後は疲れるのが当たり前。そんな遊び疲れて眠ってしまった利一を、何と宗吉は絶壁の上からエイとばかりに……。

## 何という奇跡……？

場面は変わり、なぜか今日は絶壁の周辺にたくさんの人たちが……。そう、奇跡的に絶壁の木の枝に引っかかっていた利一は、通りがかりの船に発見されたのだ。ところが救助された利一は「父親と遊びにきて、眠っているうちに落ちた」と言い張り、自分の名前、住所、そして親の名前については固く口を閉ざして、全くしゃべらない。そのうえ、利一が着ていた服はそのメーカーがわかるものがすべて切り取られていた。すると、これは偶然の転落事故ではなく、きわめて悪質な遺棄事件、もしくは殺人（未遂）事件……。警察がそう判断したのは当然だった。

## 難航する捜査を切り開いた偶然は？

しかし、いくら説得しても本人がしゃべってくれない以上捜査は進展せず、刑事たちはイライラするのみ。そんな中、偶然刑事室を訪れた地元の名刺屋が発見したのが、利一が石けりをして遊んでいた石。それは刑事たちにはただの石にししか見えなかったが、名刺屋にはそれが珍しい石版用の石であることがすぐにわかったのだ。すると、インクをこすればひょっとして消えた版が再現できるのでは……。さすがに日本の警察は優秀。1つの手がかりさえ掴めば、後は一直線。北陸署の刑事たちは、遂に竹下印刷所までたどり着くことに……。

## 意外な展開に良心の呵責が……

6歳の利一少年はその心の中では、はっきりと自分が父親の手で絶壁から突き落とされたことを認識していたはず。しかし、彼が絶対にそれを警察にしゃべらなかったのは一体なぜ……。しかし、そんな利一であっても目の前に警察が宗吉を連れてきて、「さあ、この人が君のお父さんだろう？」と言われれば、「はい」とうなずくはず……。誰もがそう予想したし、そうなるであろうことを宗吉自身が覚悟して、刑事室へ入ったはず。ところが意外なことに、それに対する利一の回答は……。それは映画を観てのお楽しみだが、人間の持つ良心や良心の呵責について、あらためて深く考えさせられることはたしか。さすが野村芳太郎監督の人間心理の描写は、見事なものだ……。 2006(平成18)年1月11日記